

Title	Perfectの主流
Author(s)	松木, 泉
Citation	英文学評論 (1954), 1: 169-180
Issue Date	1954-03
URL	https://doi.org/10.14989/RevEL_1_169
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

Perfect の 主 流

松 木 泉

Have と過去分詞との結合した所謂 perfect は現代では可成り整然とした意義用法の下で使用され、preterite や present との間で意義用法上大きな疑義を招く様な場合は殆どないと言つてよい。然しながら僅々四五百年前の英語にあつては perfect は preterite や、時には present との間に、今日の学校文典に照せば規則違反であり、破格であると言われるような意義用法上の混同とも言ふべき現象が見られたのである。以下にそういう現象の一つを通して perfect の流れを探つてみようとした。

過去の一定時に生起した動作や状態が現在まで継続していることを示そうとする場合、ドイツ語でなら例えば Ich bin schon die ganze Woche krank. と普通 present で表わすところを、現代の標準的な英語では I have been ill all the week. と必ず perfect を以てする。ここに preterite を当てることは出来ない。perfect のこうした用法は Mod. E. の初期に既に普通に見られるところであるが、決して perfect の独占するところではなく、これと並んで極めてしばしば preterite が用いられてゐた。

Syden Crist died Oure ordir was euellles—Langland, Piers the Plowman/There was never a rycher kynge

in Englande than he is—Berners, Froissart/I must confess I never had till now any excuse but that of interest, for doing ill to him—Wycherley, Plain Dealer / The one went out and I saw him not since—A. V. Genesis 44. 28 / There was none like it in Egypt since it became a nation.—A. V. Exodus 9. 24 / I saw not better sport these seven years' day.—Shak. 2 Henry VI II. 1. 2. / I was not angry since I came to France Until this instant—Henry V IV. 7. 28 / I can tell you strange news that you yet dreamed not of.—Much Ado I. 2. 4 / I did not see him since.—Antony and Cleopatra I. 3. 1 / I saw him not these many years, and yet I know 'tis he.—Cymbelin IV. 2. 66

何れも過去のある時期に始まつて現在の瞬間まで続く動作状態を表わして、今日なら無論 perfect を用ひるべきところである。一見して気の付くことは否定文の多いことである。Abbott もこれを気付かして、"The indefinite tense seems to have peculiar propriety when we are denying that an action was performed at any time whatever." (Shak. Gram. § 347) と言つてゐるが、これでは説明として物足りなう。このことは暫く措き、この時期にこれら二種の構文が同時に存在したのは事実であるが、一体どうした継続を示すのに、或いは perfect により、或いは preterite をもつてやるか、或いはこの時代だけに見られるものであるのか、又両者間には意義用法上に何らかの差異があつたのかどうか。

かつてドイツの G. Caro が O. E. から M. E. にかけて perfect と preterite の關係を論じたことがあるが、その中の「継続の意味を示すのに使われている場合」を述べた条りを補足しながら概括してみると、O. E. では殆ど凡ての作家によつて perfect と preterite とは意味用法上の相違なく用ゐられてゐた。M. E. になつてもこの情勢は殆ど変らなう。のみならず更に present が加わる。Chaucer から一例を取ると、But in two monethes yit ye not retourne.—Troilus⁽⁶¹⁾ されが M. E. 末期から Mod. E. の初期にかけて perfect は次第に preterite を圧倒して行く。(但しこの時期には present さえ、文

献上ではともかくも実際にはまだ用いられてゐたことは疑いなき。例きは Oph. Good my lord How does your honour for this many a day?—Hamlet III. 1. 91 / Lo, these many years do I serve thee. — A. V. Luke 15. 29) といふに漸く今日の用法に近づくのである。即ち perfect と preterite とは後になつて前者が後者を制圧してしまつたといふことを除けば並び行われていた間はこの兩者間には意味上、使用上に何らの区別も認められない、と言ふのが Caro の見解である。

そこで今、“Since”といふ語を「めど」としてこれに検討を加えてみたい。Since を取上げた理由は、ある文が継続の意味を表わしているかどうかを知るには、context によることは最も確実な方法であるが、より端的に、その文中に現在にまで達する時の長さを示す語句、又は since が含まれている場合に、これを一つの標識として利用することは、それほど不当な方法ではないと考へたからである。Since には副詞、接続詞及び前置詞としての用法があるが、O. E. では前置詞としての用法はまだ知られていなかった。副詞としての since は一般に “from that time till now” (N. E. D.)、接続詞では “from the time that... till now” (N. E. D.) を意味し、従つて主節には一応 perfect が予想される。O. E. でも sīþjan の意味に大差はなく、何れも過去のある一点を指して、そこに始まつた動作状態が継続することを意味する場合に使用された。ただ語原的に sīþjan は sīþ (after) + þam (that) であるため、副詞、接続詞共に、“afterwards, after” の意味を併せもつてゐて継続を表わさぬ時もあった。⁽⁶²⁾ それから資料として N. E. D. の用例と van Draat が Anglia と Engische Studien とに掲載した since に関する研究⁽⁶³⁾の中のおびただしい文例を利用することにする。

さて O. E. では今なら perfect を以てする所を凡て preterite で表わしてゐる。sīþjan は特に副詞の場合この機能がよく果されてゐた、と van Draat は言いつてゐる。⁽⁶⁴⁾ 然し副詞 sīþjan と共に perfect が用いられて継続を示す例は van Draat にも N. E. D. (Sithen の項 A. 2) にも遂に発見出来なかつた。次に接続詞としては、主節が preterite である時⁽⁶⁵⁾ sīþjan は “after” を意味し、ある出来事の後に生起した動作、もしくはその出来事によつて招来された状態を表わすのが普通である。

つたが、それでも副詞の場合と同様に継続を示すこともあつた。N. E. D. (Sithen, B, 1) は明かに継続を示すものとして King Alfred の Boethius と Bickle Homilies とから各一例を挙げている。然しこの二つも主節が perfect で継続を示す用例は N. E. D. にも van Draat にも見出し得なかつた。前述の Caro の「preterite と perfect とは全く同様に」用いられていたという表現は如何にも両者が完全に共存して同一の意味を表わしていたかの如き印象を与えるのであるが、以上の事実から考えて、彼のそういう結論にも拘らず、結局 O. E. では perfect が継続を示すことに用いられる場合は恐らく殆どなかつたのではなからうか。そしてこの機能はまだ preterite の殆ど独占するところであつた⁽¹⁾と見てよいのではないかと思う。

今、「まだ」と言つた。今日の preterite には perfect のように過去の一点に始まつた動作状態が現在の瞬間まで続くことを意味するような用法は少数の場合を除いて最早全く失われている。然し既に失われたこの機能が O. E. では生きて働いていたことは今の場合注目に値するものである。Sweet (A. S. Primer, p. 46)によれば O. E. の preterite は現在の (1) preterite 及び imperfect (2) perfect (3) pluperfect の意味を凡て兼ね具えてつたのである。この中の perfect 一項目、更に細分して、ここで言う継続を表わす用法について考えてみても、かかる用法が一朝にして出来上つたものとは思えなう。Gothic で選んでみると、果してこの二つも今日の preterite, perfect, pluperfect は preterite が動めてつたことを知るのである⁽²⁾。ゲルマン祖語におつても preterite は本源的にこの過去と現在とを結合する perfect 独自の力をもつてつたと推定されてゐる⁽³⁾。O. E. における preterite のこの用法はここに發し、以来延々と、頗る強固にこの性格を維持し続けて来たということになる。結局 O. E. ではまだ preterite のこの性格は失われることなく、極めて活潑に現実に働いてつたと解せざるを得ないのである。

M. E. に移ると、副詞 sijhan は N. E. D. では preterite, perfect 入り乱れて現れてくるようになる。sijhan が since と推移するに及んで、N. E. D. では Malory の Mort d' Arthur の Euer syns he hath kepte me at his own will. とう一節を最初に挙げてゐる。けれども preterite の用例の方が数には依然多う。van Draat では preterite だけしか

見られない。然し perfect は接続詞 *siþan* と共に漸く今日と同じ用法が見られ始める。尙この時期には *siþan* が前置詞としても働き出すが、*preterite* と共にある時は “after” を意味して継続を表わすことはなく、perfect と結んで継続を表わすようになるのは M. E. の中期で、*van Draat* の用例は十四世紀中葉の *Sir John Mandeville* の *thei seye that it hathe ben there siþe the beginnyng of the world.* から始まつている。Caro の言うように両者間には継続を表わす働きにおいて、明瞭な意味用法上の区別は見られなかつたと思われる。M. E. を概括すれば perfect は次第に活況を呈して *preterite* に迫り始めるのであるが、*preterite* の優位はまだ覆されていない。遙か遠き日に胚胎したこの性格は依然として強く維持されている。

M. E. から Mod. E. に移ると、この時代の初期に副詞 *since* は perfect と結んで、用例は Shakespeare を中心として一時に豊富さを加える。が他方では *preterite* も同時に行われている。接続詞 *since* の情勢も同じで、perfect は *preterite* に比べて一層一般化したらしく、又 *preterite* と共にある時の *since* は寧ろ “after” を意味する場合の方が多くなり、継続の意味は perfect に譲り渡したかのように見える。このことは前置詞 *since* についても亦同様である。即ち *preterite* の場合は、ある出来事の後に生じた新たな出来事を示すのに用いられ、継続の意味は M. E. 中期以来、殆ど一切の場合に perfect がとつて代つてしまつてゐる。「初期近代英語では perfect は全く一般的になり、preterite は稀である。但し Shakespeare にはまだ見られる」と言う Caro の結論はまづ妥当である。こうして両立しながらも、使用頻度において perfect は遂に *preterite* を凌駕したのである。

ここで一考すべきことがある。両者間には意味上継続を示すという点では同じでも、ただ使用頻度の上だけの相違で、それ以外には用法上果して全然相違がなかつたかどうかといふことである。少くとも両者がその共通部分である一つの機能を果す上に、何百年間に互つて全く同じ比重で用いられて来たと考えることがむしろ不自然の様である。そこには必ず勢力の対立があり消長が見られた筈である。用法上、継続を表わすのに単に perfect が次第に *preterite* の地位を奪うに至つたと言

うだけでなく、確かに、それも特に preterite の側においてある推移があつた様に思われる。さきに挙げた perfect 同様に働く preterite 文例中、決して凡てとは言わぬが否定文の多いことを指摘して置いた。van Draat もある箇所どころ言つて「When we find the same sentence with the Past Tense and the Present Perfect, the former very often implies a negation.⁽⁴⁾」

現代英語において perfect が否定辞によつて否定文となる時、それは一体どんな意義をもつのであろうか。一般に perfect の意義を分類するに當つては第一に「完了」と記されるのが普通である。ところが問題にしたのはその「完了」の項に掲げられた例文中に否定文が見られることである。極くありふれた場合を例にとれば、I have read it. は完了の例として問題はない。尤もこれも厳密には「読む」という動作自体の完了に重点を置く perfective の場合と、「読んだから知つてゐる」と動作の結果に重きを置く resultative の場合とあるのであるが。然し、I have not yet read it. はどうであらう。これが動作の完了であらうか。have not read は「まだ読んでいなう」と言うことである。まだ読んでいないと言うことは、読むという動作がまだ行われぬということであり、読むという動作は実は未「完了」でさえもなく、ましてや完了とは全然没交渉の筈である。それでは何であるかと言うに、have not read はまだ読むという動作が行われぬままの状態が現在の瞬間まで継続してゐるといふことを表わすものに外ならなう。You have not tied it tight enough: it is sure to come undone again.—Sweet (N. E. G. § 2242) では「しつかり縛るといふ動作は遂に行われずじまつて、この状態がそのまま続いて現在に至つた」といふ意味であり、だからこのままの状態ではまたきつとほどけるぞといふのである。又 I have not played chess this year.—Jespersen (M. E. G. IV 5.1.(4)) では、今年はまだ chess をする機会なく現在に及んでゐるといふ、状態に重点を置いた気持を表現してゐるのである。何れも完了を示すものではなくて、継続的な様相、ある状態を示すものであると言わなくてはならない。要するに perfect の否定形は時間に長短はあつても凡て継続を表わすものであるといふことになる。このことに多少注意を払つていたのではないかと思われるのは Curme である。「継続を表わす場合」といふ項目の所で、

perfect の説明中唯一の次の様な否定文を挙げている。She hasn't left her bed for a week. (Syntax § 373 a: Present Perfect to Represent an Act as Still Continuing) の perfect は for a week という副詞句の故にのみ継続を示しているのではない。これを除外しても優に She hasn't left her bed. は病床を離れることのないままの状態が現在まで継続してゐるというまじり病臥中であるという一つの状態を表わすものであり、何としても完了とは無縁である。又 van Draat (ibid. E. St. Bd 32, p. 373 脚註1)の次の言葉は多分にこの真実に触れるところがある。“The negative not frequently denies that the continuing has been broken: We have given her no rest [since we came.]—Izack Walton, Compleat Angler ch. xx means: “We have harassed her all along.” I have not [yet] wetted my line [since we met together.]—ibid ch. v: “My line has remained dry.”〔〕内は原文により筆者の補足した部分であるが、since 以下の時間を示す副詞句を省いても尚且つ充分に継続を示すものであることを裏書きしている。

このことは preterite が perfect 的な性格を保有してゐた限り、当然 preterite にも通用する筈のものである。従つてさきの I saw him not these many years. という台詞には Belarius が永い年月 Cloten を見ることなく今に至つた、という永い年月に対する回顧を含めた感慨がうかがわれるのであり、又 You spoke not with her since? においては、Gentleman があれ以後現在まで Cordelia に目通りせぬままの状態が続いてゐるのか否かを Kent が確めたことになるのである。

この様に preterite が単なる否定辞の添加によつて継続する状態を表わし得るとすれば、どんなに perfect が一般化しても、この periphrastic form に更に否定辞を加えて複雑な形態にするよりは、むしろ少しでも簡単な今までの手続に頼つたことは極めて自然であると思う。意義の不明明や混乱を引起さぬ限り、brevity を追うことは言語の通則である。尤もこれは現在における事実から、古い場合を推し測つた一つの推論である。実際には perfect の隆盛に引込まれ、更に論理的反省も加わつて、否定文でも perfect 形式をとる様になつたことは事実が明瞭に物語つてゐる。それにも拘らず、尚且つ否定文に

あつて *preterite* が数多く見られたという事実⁽¹²⁾、そして又現在においても *never* は *preterite* と結びつく方が、*perfect* と結びよりも、より “idiomatic” であるとする Jespersen (M. E. G. IV 5-1.(6)) の主張はこの推論を充分根拠づかせるものであると言つてよく。

この *perfect* と *preterite* との関係を要約すれば、O. E. から M. E. にかけては継続を表わす機能はまだ *preterite* の独占するところであり *perfect* の参与は殆ど認められないのであるが、M. E. の中頃から *perfect* は比較的急速に *preterite* の役割を奪いつて行く。ただ用法上、否定文だけはどちらかと言へば *preterite* に任せてあつて。この大勢は Mod. E. の初期を絶頂として、以後 *perfect* に統一されて今日に至つてゐる。

過去と現在を結びつけ、そこに継続の様相を示すという機能を *perfect* に譲つて、ここに *preterite* はゲルマン祖語以来伝え來つた曾ての *perfect* 的性格の中の最後の部分を喪失して、全く現在時との縁を切ることになつたのであるが、*preterite* からかくも強固な性格を奪いつた *perfect* である以上、*perfect* にはそれをこなすだけの素地がなければならなかつたのであるし、そういう土台が簡単に出来上るてゐるものでないことも疑いない。どうしても本来 *perfect* に具わつてゐたものであると考へなければならぬ。事実確かに *perfect* には古くから、これを受け入れ同化して、自らにおいて生々發展して行くに足る力を内に蔵してゐたのである。

今日の *perfect* のもつてある例を以て *hebbe jone fisc gefangene* の様な文の意味するところは、文字通り I have the fish (as) caught. であり、捕えた魚を現に所有してゐるという状態に外ならない。意味の前面に押出されてゐるものは動作の完了ではなく、正に一つの状態なのである。*perfect* が發生当初には現在時における状態を示すものであつたことに注意したい。ところで、現在の状態を示すものとは言へ、そこに多少とも過去のなにおいが感ぜられることは否めない。それは実は *have* の何ら関知するところではなく、目的語 *fisc* を修飾してゐる過去分詞 *gefangene* の發するものであつて、

この過去分詞が次第に *have* と固く結合することによつて過去の觀念を導入し、やがて全き *perfect* 的な性格を完成させるのであるが、過去の觀念が明確に現れた時、継続的な意義をもつ動詞が⁽⁶⁾この複合形態に参画すると、その動作が過去より継続して現在時において尙その状態にある、という意味を表わし得たのである。 *perfect* が継続を示すのはここに始まる訳である。元來、*perfect* の初源的形態の本質上、過去分詞は必然的に他動詞のそれではなくてはならなかつた訳であるが、*N. E. D.* や他の古文例に見られる動詞が凡てと言つてよい程、瞬間的な意義をもつ動詞であることから、他動詞とは言え、その凡てが最初からかかる形態を取り得たのではなく、先ず瞬間性動詞が、そして次に、過去意識の明確化と共に継続性動詞が用いられたと考えなければならぬ。その理由とするところは、純粹に現在時の状態しか示さぬ發生当初の形態において継続性動詞が用いられることは、状態を表わすという点で重複を来す以外に全く無意味であり、もし用いられることがあつたとすれば僅かにその継続性状態を強調するに過ぎなかつたと思われるからである。これに加えて今一つの根拠がある。自動詞は目的語をとらぬという性質上(勿論正確には、目的語を取らなくてよい動詞、又は取らぬ場合にその動詞を自動詞と稱すべきであらうが)、原始形態においては之に参与すべくもなかつたが、*have* と過去分詞とが緊密に結合して一この動詞力を發揮するようになるに従つて、*M. E.* の初期以来自動詞もこれに参加し始めたのである。*Curme* の表現を借りれば、先ず継続的な意味をもつ自動詞が他動詞の例に倣つたのである。(Durative intransitives followed the analogy of transitives.—Syntax p. 359)「倣つた」というところに注意すべきである。もし *perfect* がまだ現在時にとどまつていたとすれば、その限りにおいては、継続性自動詞自体がこの形態をとることは(上と同じ理由から)無意味であり無用であつたから、類推によつたにしても兎も角もこの形態をとる様になつたことは既に *perfect* にはつきりと過去の觀念が生じていたことを物語るものであり、ひいては他動詞までも継続性動詞は遅くともその頃までには実際上用いられる様になつていたと解すべきだからである。斯くて結局 *perfect* は發生当初は動作の完了を表わすものではなく、純粹に現在の状態を表わしていたのであり、これが後に *preterite perfect* 的機能を吸収する素地となつて、やがて眞の *perfect* として過去と現在を結合する性格を帯びるや否や継続性動詞

と共に継続を示すに至り、また所謂進行形⁽¹⁵⁾が確立するやいち早くこれと結合して、新に瞬間性動詞においても継続(厳密には反復であることもあろうが、多数の点の連続が眼に一本の線と映ずることもあるように、ここでは便宜上継続の中に含めた)を表わすことに成功したのである。こうして perfect はその表わすところ「現在の状態」から「過去・現在に互る状態」へ⁽¹⁶⁾の方向に拡大進展してきたと言つてよさるのである。

Perfect は發達途上、その機能の面で、今日見られるように様々の分化があつたが、過去と現在とを緊密に結びつけて、その間に横わる継続的狀態を示す機能は發生以来の流れを受けついで、歴史を貫いて來ている。そういう意味でこの機能を perfect の主流と名づけつてみたまづである。

註(一) G. Caro: Zur lehre vom altenglischen perfectum, II Teil, 3 (Anglia XVIII) 及び Das englische perfectum und praeteritum in ihrem verhältnis zu einander historisch untersucht (Anglia XXI)

(二) 49 Chaucer の *the knyghtes tale* を表した部分に present は *now used* と *now used* の二つがある。Gräf (Die Präsenstischen Tempora bei Chaucer, Anglia XII p. 537 Anmerkung) は次のように述べている。“Doch ist ein fall auszunehmen. Soll es nämlich besonders betont werden, dass eine an sich der vergangenheit angehörige handlung auf* auffälliger weise noch bis in die gegenwart hineinreicht.”(* Gräf の原文とはなすが脱落して *now used* の二つはなつかと *now used*) じまり強調された場合には常に present が用いられたと言ひるのである。この意味を表わすのはやはり perfect が普通であつた。

(三) Abbott (Shak. Gram. § 346) は *jampridem opto* などの Latin idiom に「致すものとなし」、同時に「動作が現在に継続して居る以上、話者は動作の現在性と重点を置いて動詞を選び、過去から現在に至る継続の面は副詞句に任せて省みなす」と説き、Jespersen (M. E. G. IV 4.7. (2)) は人の健否を問ふ際には当然現在が関心の的となるから present を用ひ、“after thought” 以下に付加された語句が “inclusive time” を示すことになるのであるとせや立入した説明を与えて居る。

(4) Wyclif 論 *It is lo, so many ȝeiris serue thee. Jespersen (M. E. G. IV 47(1))* は *lo* は “the direct imitation of the foreign (= Greek) idiom” と見做し *Trnka (On the Syntax of the English Verb from Caixon to Dryden, p. 16 註)* は Latin の *lo* 語源を論じている。Shakespeare の *Titus Andronicus* にも *lo* 語源を要する。

(5) cf. Sweet: Student Dict. of A. S. *siþjan*, I. adv. afterwards, since II. conj. after, since

(6) P. Fijn van Draat: The Adverb Since (Anglia XXXIII); The Loss of the Prefix *ge-* in the Modern English Verb and Some of its Consequences, II, The Conjunction Since (English St. Bd 32); The Preposition Since (Anglia XXXV)

(7) *ibid.* Anglia XXXIII, p. 145f.

(8) *Siþjan* と始まる従属節はその意味から前接 preterite である。この perfect をもつる場合があるが、これは十七世紀末頃 *siþjan* の *siþ* である。

(9) cf. J. Wright: Gram. of the Gothic Lang. § 432

(10) Cf. G. O. Curme: Syntax § 373

(11) *ibid.* Anglia XXXIII p. 171

(12) Caro (*ibid.* Anglia XXI) は perfect の現在とをける用法を *siþ* と分類し、その *siþ* の歴史的に perfect と preterite との用例を対照させようとしているが、always, often, sometimes, seldom, ever, never の様な副詞を伴うことのある場合を見るに、preterite の全用例十八は ever と never を含む二種しかなく、中十五例は never を含んでいる。同様なことは Jespersen にも見られる。Mod. E. の初期には preterite と perfect との間には厳密な区別なしとする箇所 (M. E. G. IV 57(3)) と著した二例が否定文。又 always, ever, never と共に preterite の来ることがあるとする箇所 (*ibid.* 57(4)) と著した二例が never だけ。

(13) Deutschbein (Die Einteilung der Aktions-arten, E. St. Bd 54, p. 80f) の所謂 Imperfectiv (乃至は Continuativ) の動詞。

(14) Deutschbein (*ibid.*) の所謂 Perfectiv の動詞。

- (15) 継続的様相を perfect において顯現せんとした意欲は英語特有の所謂進行形の發生進展にも決して無關係であつたとは思われな
い。進行形が種々の名称で呼ばれ、その用法が多岐に亙るとしても、その本質的な機能が動作の継続的様相を表わさんとするもの
であることは疑い得ない。